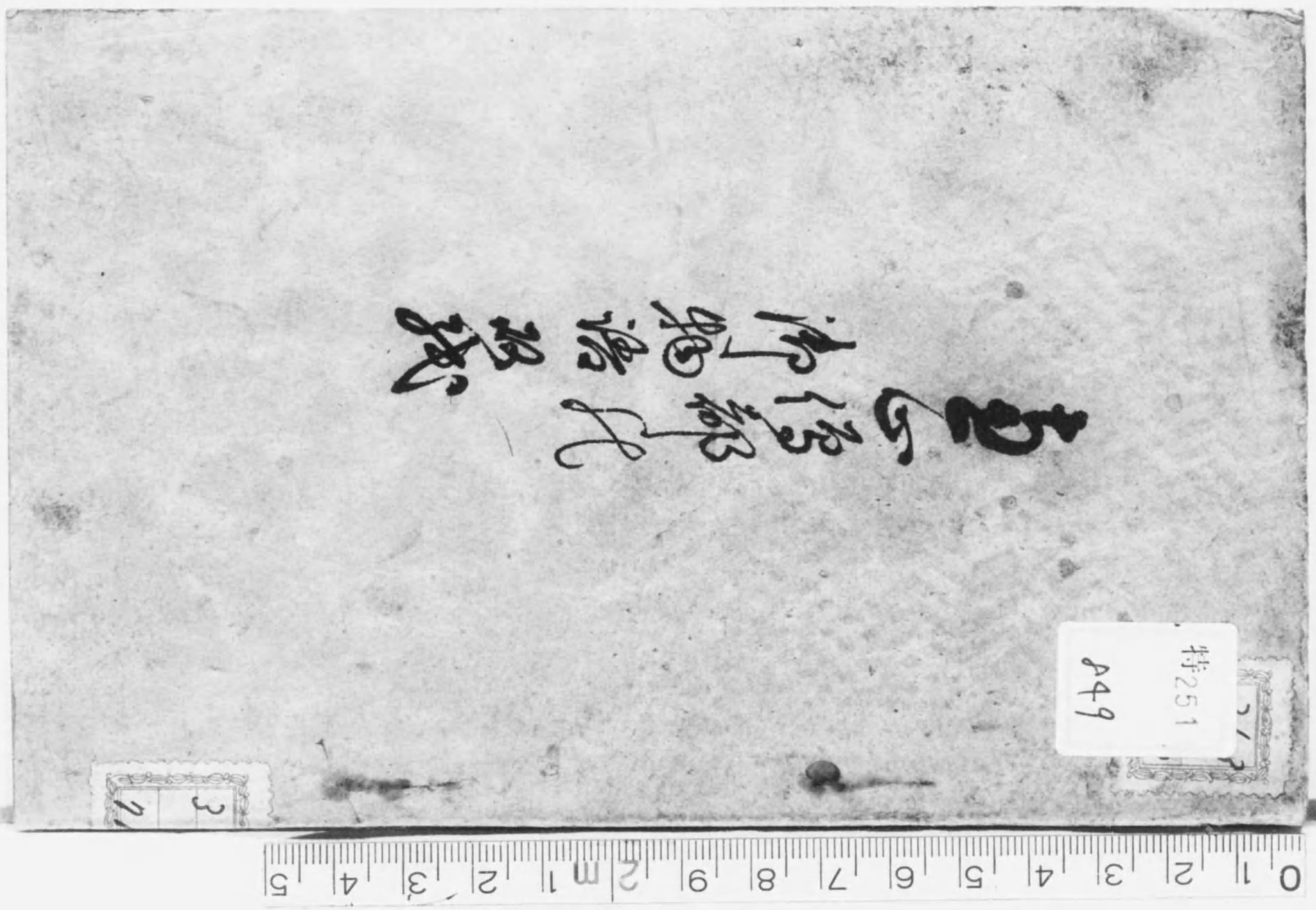

特251
A49

部

特251
849

# 惠心僧都之御物語雙紙

抑惠心僧都は日本第一の學匠道心者なり。一切經七千餘卷を開き見たまひしこと第五度なり。諸經の中より罪惡生死の凡夫往生すべき要文をえらび出して往生要集と名づく。彼の抄普く我が朝に弘め、其の後、唐土に渡し給ひ、漢朝の天子三公より以つて貴僧高僧道俗男女歸依□かんして靈木を擇び、五十貳間に御堂を建て彼の要文を本尊として月の六齋には貴賤道俗集りて此の文を聽聞す。各々先づ日本に向ひ、南無源信如來 と唱へて三度禮拜すといへり。未だ凡夫僧の體にして、異國の諸人に萬德圓滿の佛號を稱せられ給ふは我が朝の惠心僧都ばかりなり。父母の遺言をちがへず孝養を深く存し、母の慈念深くして遂に佛道の本意を遂げたるは、唯此の事に極れり。僧都生れ給ふより一期の御有樣利益して申し述べ侍るべし。

此の惠心僧都の俗姓は卜部氏、大和葛城の郡當麻の里の人なり。其の父母一人の男子無くし

て、同郡の内高尾寺と云ふ寺の觀音靈驗あらたかなる間、三箇年の程參詣して祈誓申すに、夢の告に新なる御帳の内より高僧一人出で給ひて、一顆の光明ある玉を與へ給ふと見て懐姙す。其の後九月を見てあたりも耀くばかりなる男子を誕生せり。□□したがつて花のかほばせ月の姿世に類なくましましける間、父母悅び給ふこと限り無し。少兒既に七歳になり給ひし春の比、父、病の床に臥し今を限りと見え給ひしかば、彼の少兒をよびよせて、枕の邊に置きて手に手を取りくみ、顏に顏を合せて最期の別れを惜しみ遺言し給ひける有樣こそ哀におぼえけれ。汝幼といへども我が今の詞を忘るなよ、是最後の遺言なり、長き世の思ひ出になるべし、我が身に一人の男子無くして、みうちを高尾寺の觀音に三年の間詣出して申しうけたりし子なり、せめては十歳ばかりにならんまで、我が身ながらへて汝が姿をも見まほしきこと限りなけれども、心にまかせぬ生死海のならひなれば、緣の咲き出づる花のよそおひを見捨てて、唯今北方の露と消えなむ事こそ悲しけれ。相構へて相構へて高尾寺の觀音に詣でて我が後世を弔ひ給へ、又如何なる僧房にもちかづき學文して僧になり、必ず我が菩提を弔へやとて、緣の鬢をかきなでて、涙を流しこがれ泣きしづみ給ふ有樣、誠に哀にぞ見えにける。かくて如何程も無



くして入滅し給ひぬ。ここに少兒母と共に思の煙むねにむせび、悲しみの涙袖に餘り、夢現とも覺えず、空しき父の手を取り、唯我をも伴ひて行き給へやと泣き悲しみ給ふ事限りなし。さる程に、見る人袖をしぼり、聞く人むねをこがす。かくて伴ひ奉ることあらねば、遂に一片の煙とぞなり給ひける。

其の後、此の兒、父の遺言を忘れず、毎日高尾寺へ詣でたまひけり。其の道すがらも、我が父の、三年の間此の道をこそ參り下向し給ひつらめと泣く〳〵御堂に參り、こゝかしこを見まはし給ひて、彼の間此の間にても、父の禮拜し通夜し給ひける處なれば、なつかしく名殘をしとて歸るさを忘れ、本尊と申しながら、我が父賴を深く懸け奉りし御事なれば、願はくは觀音我を僧になし父の後世を弔ふ身に成してたび給へと、懇に恭敬禮拜し祈念し給ひければ、未だ幼き身のかくばかり懇に思ひ入り給へる事よとて、見る人涙を流して哀を催す事限りなし。

或時、少兒夢に見給ひけるは、彼の寺の經藏に入りたりければ、大に明かなる鏡と、少し曇れる鏡と二つあり。高僧來て云ふ、此の大に明かなる鏡は汝が寶にあらず、少し曇れるを與ふるなり、汝比叡の山に上り、横川にして是を磨くべしといへり。此の由を御母に語り給へば、

悦び給ふこと限り無し。夢を合せてのたまはく、鏡は佛法の智慧なり、汝比叡の山に住して、智慧の鏡をみがきて父を引導し、天下の燈となるべき瑞相なりとぞ悦び給ひける。

しかれども、やもめにて世間うとしくましく〳〵ければ、寺へ上すべき便もなく、歎きながら月日を送り給ひける程に、比叡の山より大廻の行者といひし聖、其の里近く通りけるが、道の程にて手水を遣ひ給へば、少兒是を見て、其の水は不淨に候ふと申されければ、聖曰く、諸法に淨・不淨ありやと。少兒重ねて曰く、淨・不淨なくば手水を遣ひ給はでこそ有るべけれと、のたまひければ、聖理にまけて、少兒の花の姿月のかほばせ□はりなかりし有様を見給ひて、御母の御もとへ尋ね行きて、此の少人を申し請けたき由申されけり。我賤しきといへども、比叡の山に住し申し候ふ大廻の行者と申し、國々山々寺々を殘り無く行き廻る聖なり。此の少人の眼の内に智慧の海を湛えて、拔郡の相まします、我が山の慈惠大僧正の御弟子に成し給へ、口入申すべしとのたまひければ、母御前なのめならず悦び給ひて、左右なく領承せられけり。

聖、山に上りて僧正に此の由申し入れければ、僧正のたまはく、佛法の慧命を繼ぐことは利根にしてきりやうなからん少人にしくはなし、縱令其の身は賤しといふとも、佛法の器なるべく



は、急ぎ迎を下すべしと有りければ、聖面目あつて力者共を相具し大和へ下り、御迎に參りたりといひければ、御母、必ずしも今日明日の事とは思はざりつるに、嬉しさの中にも、又心元無く胸うちさはぎ、詞すくなに、思ひわきたるけしきもなし。と仰せければ、聖しひて云ひければ、御母申されけるは、一日思ひあへず、さは約束申し侍りしかども、今日明日の事とは思はざりつるに、されば契深かりし故人の別れの時も、此の少き者の詞こそ、自らが歎をやむるたよりとはなりつれ。未だ一夜も恩愛の懷、慈悲の衾の下をばはなれざる少き者にさへ、唯今別れなば、今夜もいかであかすべき、御迎は嬉しく侍れども、死して別れしの上に、又生きての別れを重ねん事悲しみの中の歎きなるかなとて、女の心思ひきり得ず侍れども、また、少き者の行末を思へば、又、悦びの便なり、さらば相具して上り給へと、泣く〳〵口說き給ひつゝ自ら裝束せさせて、既に力者の肩にのせ、門の外へ出で給ひければ、暫く申すべき事有りとて呼びかへし、納戸の内なる手箱の中より、持經入れたる綿の袋を取り出し、少兒に與へてのたまはく、此の經は是汝が父の朝夕讀み給ひし阿彌陀經なり、汝が爲には長世の記念なるべし、寺に上りなば別の經文をば先づ差置きて、最初に此の經を習ひ讀みて、父の菩提を弔ひ給ふべし、相構

へ〳〵遺言を忘れさせ給ふなよ。あの多武峰の上人の如く、智慧も有り道心深くして、貴僧になり給ふべし、唯今の自らが詞をば最期の遺言と思ひ給へ、親として子を思ふならひの切なる事たとへんかたもなかりし恩愛の別れの忍び難き事申せば中々愚なり。しかれども、父の遺言といひ、汝が行末を思へば、はかなき別れを忍びて、此の御聖に參らせ置く上は、一日片時の間も寸の暇を惜しみ、學文をよく〳〵したまふべし。親が見まほしければとて、暇を空しくして里へ下り給ふなよ、親有りがほに若し自らが元へ來り給ふものならば、更に對面すべからず、親子の睦も有るべからず、よく〳〵學文して貴僧にもなり、一天の君にもしられたてまつらむ時、是より迎をまゐらせ候はん、其の時見參申すべし。此の詞を忘れ給ふなよとて、御經を渡し給へば、少兒泣く〳〵是を請け取りのたまはく、かなしみ涙袖をしぼり、悲しきかな父には死して別れ、母には今又生きて別れしこと歎きても猶あまりあり、別れ奉るさへ悲しきに、今更御勘氣をかふむり、いづくともしらぬ比叡の山とやらんに、一目も知らざる人に伴ひて、假初乍ら立ち出でて、又いつか逢ひたてまつらんと、聲もをしまず泣き歎き給へば、御母をはじめて多くの人々、是を哀れみ泣き悲しむこと限りなし。



それよりやがて比叡の山に上りて慈惠大僧正に對面し給へり。僧正此の少人御覽じて、誠に此の兒は眼の内に智慧深くして利根の相ありと悅びて學文せさせ給ふに、一字を敎へ給ふに千字を悟り、住山の歲月久しからざるに、經論の源底を究め給へり。三年も過ぎければ、世になびなくおはしましければ、大聖文殊の化身とぞ疑はれける。既に十歲に餘り給へば、三塔に比びなし。三世の學匠に勝り一山の不思議にそなへたり。末代の佛法の慧命は此の少人に留めたりといへり。十三にして出家になり、惠心の御坊とぞ申されける。釋迦一代の敎法鏡を磨き五時八敎顯密の底を極めて殘りなし。されば諸山にも洛中にも、かゝる不思議の人ありとぞ風聞しける。

然るに、村上天皇の御時、天曆十年六月廿一日淸涼殿に出でて、五日十座の御八講ありける。此のこと一天の帝きこしめして、慈惠僧正に勅して、件の少僧を相具して今度の御八講を勤めたまへと有りしかば、面目を施し、相具して參勤す。未だ十三になり給ひければ、容顏うつくしくして、羅睺羅尊者の古も、いかで是にはまさるべきといへり。綾羅錦繡の色を調へて法服とし、金銀をちりばめ、金の香爐に水精の念珠取具して、高座に上り給ひける御姿、心詞も及ばず、昔靈鷲山の重閣講堂にして、一代聖敎結集の時、一千人の大阿羅漢の中に、

阿難尊者を導士としたひ、角獅子の高座に上り、如是我聞と說き給ひける有樣も、いかで是にはまさるべきと見えたり。迦陵頻伽の梵音妙に、仙洞の雲に開き、聞くに涙とゞまらず。既にしやきやうのたんに及び、せうきせうきのこくしをのへしんしんのをくれをしゆすしそんくわせんにして法水波靜なり。舍利弗の智慧、富樓那の辯舌もいかで是にはまさるべきと覺えたり。帝叡感の餘りに御衣七重、自らが御布施とありて、御簾の內より出し給ふ。一の人・三公より始めて月卿・雲客・下萬民に至るまで涙をもよほし、隨喜の袂を絞りけり。いまだ高座よりおり給はぬさきに、香爐筥僧都の座に置きつゝ惠心僧都と申しき。慈惠僧正を始めとして三千の衆徒我が山の面目是に過ぎじ、末代の法の燈と悅び給ふ事限りなし。御八講結願の後、白川の宿所へ還りたまひて思召すやう、我始めて寺へ上りし時、學匠になり一天の君に知られたてまつらんずる身となりての時對面すべしとおほせられしかば、出家の姿をも見えたてまつり、母君に逢ひ御姿をも見たてまつらんと思食し、御文をあそばし七重の御衣を添へ、大和の國母御前の御方へ送りたまへり。その文に曰く、たまくうけがたき閻浮の人身をうけ、學しがたき成佛の道を習ふ、是併しながら父母の重恩なり、七歲の時恩愛の家を出で寺に上りし時、學匠になり一天の



帝にも知られ奉らん程の身とならん時、對面有るべき御契約にて御座有りければ、其の御詞は肝に染みて忘れ難く侍りしかば、止觀の窓に眼をさらし、見聞の机に臂をくだき、何の日か早く宿昔の本意を達してはうかんを始め奉らんと螢雪の勤をこたらず。然れば十五にも及び、既に圓宗の學位にのぼり、三千の面目にそなはり、一天の帝より俸祿をたまはり、其の恩賞の御衣是なり、早く御許されを蒙りて甲斐深き御姿を見たてまつらんと書き給へり。御使此の文と御衣とをたまはりて御里へぞ下りける。母君、御文を開き見給ひてさめくと泣きたまへり。使より始めて見る人涙を流し、ことはりとは思召しけり。未だ幼少にして一天に名を揚げ、面目を東西にほどこしたまへり。嬉しさにやるかたなくして泣き給ふかと思ひあへば、良久しくありて使におほせのたまはく、汝僧都の御房に委しく語りたまへよ、自ら本意に背くうらめしければ、態と御返事は申さぬぞ、詞にて申し候へ、と仰せけり。かくばかり世を憂ひて、一旦の是悲口を育みたてまつらんと思はば、なにしに僧にはなすべきぞ、俗になし、父の御跡をこそ嗣がせて心安くそひたてまつりてすぎ侍る身なれども、片時もはなしがたき恩愛の別れを忍びて多年に及べり。あさゆふ戀しく思ひて、かやうに侍る事御心より猶切なれども、長

きやみぢを助けてたび給ふべき事こそは本意なれ、一分も悟もなき愚なる女の身に、空しく信施を受くべきことなし、御志は何より嬉しく侍れども、御衣をばすきやりに返し奉る、對面は是より申すべしと語れ。とてさめ〴〵と泣きたまへば、使はやがてかへり、僧都は御母いかに悅び給ふらんと思食す處に、御使御返事委しく語り申しければ、僧都も智慧深くまし〳〵ければ、御心中をしはかりはら〳〵と涙を流し聲をあげて、ありがたき御志かな、普通の女人にておはせず、是は權者にてまします。親となつて子を思ふこと鳥類つばさに至るまで類なきものぞかし。七歳の時別れ奉りて、ことし七年の間互に對面なければすゝみてこそ見給ふべきに、かくまでのたまひて御返事にあづからず、御衣さへ返したまふ御心こそ貴くおぼえけれ。と、さめざめと泣きたまひけり。

其の後、僧都思ひきりて比叡の山に返りて、今は一心に父母の菩提を弔はん爲に、十二年の參籠を始めて行はんと思食しければ、慈惠僧正に御暇を申されけれども、末だ若くまします時能く學文あれとて左右なく許し給はず。僧都强ひて申されけるやうは、抑本地釋尊は御母摩耶夫人の御爲に七歳にして始めて道心をおこし給ひて、忉利の天に九十日を勤めて母の菩提に法を說き給ふ。加之、黄金の御膚に父淨飯大王の金棺をになひ給ふも、皆是父母の孝養を專にし給ふ故なり。自ら十二年間山院を出でずして行ひ勤めて二人の親の菩提を祈るべし。と頻に申されければ僧正ことわりに伏して暇をたてまつる。僧都悅び給ひて、昔釋尊檀特山の修行を思ひやり、嚴冬の節の寒き朝も裙衫の雪をわけ嶺に上りて花を手折り、九夏三伏の暑き夕にも雲にまじはり谷に閼伽の水を掬び給へり。止觀鑽仰の窓の內には一念三千の月に心を澄まし、觀念座禪の床の上には一宵七早の霜去つて夜を以つて晝につぐ。黨修練行の勤怠ることなし。常にことふものとては、松にしげき峰の嵐、梢に吟ずる尾上の猿、おとづれわたるものとては、小萩を過ぐる村時雨、尾上の鹿の聲ばかり、頼をかくる歌とては、十羅刹女の擁護の誓、望を期することとては、卽往安樂の至極なり。

六根懺悔の功積り、慧日の光に照されて、罪障の霜消えしかば、十二年の春秋も程なく過ぎけり。僧都修行の數なるまゝに、一代聖敎を拠文にして、母の御恩の深き要文を開いて觀進といふ文を御消息に書き添へて母君の御方へ送り給へり。其の狀に曰く、其の一休の肝要は父母の御恩に極れり、恩は山よりも高し、德は海よりも深し、ことばはきはまるとも述べがたし、一劫

盡きても報いがたき故なり。釋尊難行の苦を思ひやられて、十二年の苦行を勤め、父母の菩提を祈り奉り、しかのみならず一度聖教五千餘卷の肝要を集めて母の恩の深き旨を明かして、九品往生を勸め奉るものなり。十二年の苦行を隨喜し給ふものならば、早く許されを蒙りて、片時の間も對面仕らん。と書きたまへり。此の度は母御前是を見たまひて御返事に曰く、誠に十二年を限りて父の遺言をも知り給へりと有がたくおぼえ侍り、中にに悲母勸進の要文を賜る事往生極樂の龜鏡と深くたのみ侍り、常は此の聖教を開き見て御戀しさを慰むべし、御年も今は卅に及べり、七歳にして竹馬に鞭うち給ひし面影ばかりつねは思ひ出侍り、台嶺に程近き所なれば態と是より申し候はん時御下り候へ、思ふ仔細侍り。と、更に御許しなかりけり。

此の御返事を開き御覽じて、僧都御母を恨み給うて聲をあげて泣きたまひけり。さしも身を苦しめ心を碎き、十二年の月日を待ちくらしても母を見奉らんと思ひつるに、かくばかり御心强く御許されの無きことよ。とて歎き悲しみたまへり。かくて泣く〳〵年月日を送り給ひけり。卅に餘り四十に滿すれども、猶御許されもなかりしかば、僧都思ひの餘り根本中堂へ參詣して藥師如來に祈誓したまへり。我比叡の山に契深くして山王大師の眷屬となり、醫王善逝の本尊とたのむ。仰ぎ願はくは藥師如來聖十二神將滿山の護法哀を垂れて戀しき母を見せたまへ。と毎日參詣して申されけり。或時中堂より下向し給ひけるが、よに古里の戀しきに、高き岳に上り大和の方を見やり給ひて、あの雲の下にこそ我が母のまします里はあるらん。と、戀しや床しや恨めしや、此の世は老少不定なる境なり。生者必滅の所ぞかし。我が母、心强くわたり候ふとも、我が身もし先立たば、いかに歎き給ふとも後悔千萬及びがたし、御身も既に老衰し給ふ、餘命幾何ならず、西の山に傾く月、草葉の露の風をまつより猶仇なる御事なり。强いて參らば不孝の苦逃れがたし。せめてはかくれ忍びてなりとも御姿を見奉らん、と思食してひし〳〵と思ひ立ちたまへり。殊に御身したしき御弟子二人相具して修行の樣にもてなし、古里の方に赴きたまへり。折節秋の暮なれば思ひ立つより旅衣、涙の露に爭ひて、袖の時雨も晴れやらず。西坂本を下り、花の都をさし過ぎ、木幡の山に出でてけり。宇治の平等院へぞ參り給ひけり。山路の雁、野邊の鹿、秋を慕へる聲寒く、四方の梢千葉の色、はや霜枯れとなりにけり。さすがならはぬ旅なれば、思ふ程にも歩まれず、奈良の都に入りつゝ七大寺へ參詣あり。葛城の郡御里近くなりけるに、常に母御前の御使に參りけるしもべ男、文をさゝげて足早に歩みけるが、僧

都の御房を見つけ奉りて、こはいかなる御事ぞや、態と御使に參り候ふ。と御文をさゝげて申しけるは、御母御前此の程は風の御こゝちとて惱み候ひつるが、既に八旬に餘り給ふ御事なれば、老の病と見え給へり。殊更けさの曉より口どもり給ひて、物をものたまはず候へば、今一足もとく參り付き候はんと急き候ふ處に、是までの御下向有りがたくこそ候へ。さりながら此のあとにもいかなることもや候ふらん、疾く〳〵御急ぎ候へ。と申すもあへず涙にむせびける。僧都文を開き見給ふにあたはず、顏におしあて、道の邊にひれ臥し、既に攝取したまひける有樣見るに目もあてられず、哀にぞ侍るなり。二人の御弟子涙を押へつゝ前後に並びて申されけるは、かくて人目繁き道の邊に時を移し給ふべきにあらず。御歎きはことわりなれども、若しもや未だいき給ひたる御姿を今一日御覽じたまへと一足も御急ぎあるべし。と樣々に申しいさめ、左右の袂を引きたてて、やう〳〵に行き給ふに古里ぞ見えにける。寡婦にて多く年月を送り給ひたる處なれば築地はあれども覆なし。門はあれども扉なし。庭には草深く、籬の蔦の風に靡くも、やもめのしるしと見え、軒端の薄の露しげきも、まどしき人の所と覺えて、いとゞ哀ぞまさりける。住み荒したる木の板間は、雨も漏り風もたまらぬ風情なり。左右なく御母の病の床



へ入り見給へば介錯の人多くして尼女房五六人あと枕にぞあり、各々僧都を見つけたてまつりて、聲を一にして泣きあへり。遙に日をへだてて行く道を、つげ奉る日の内に來り給ひつることと有りがたく思ひ侍れども、御母はけふの辰の終に空しくなり給へば、生きての御對面もなくしてかやうになり給へる事、御心の内いかばかりと、聲々に泣き口說き給ひければ、問ふに辛さのますかゞみ、中々此の有樣を見ざらましかばと悲しみ給ひて既に攝取したまへり。やゝしばらくして心をとりなほし、泣く〳〵絹をひきのけて母の御姿を見給へば、七歲にして別れ給ひし其の面影もかはり果て、その御姿も覺えず、八旬に老衰して病苦にせめられ亡き人數に入り給へば、御有樣を見給ひける僧都の御心中をしはかり哀れなり。介錯の人々泣き口說き申されけるは、年頃御對面なかりつるは別に仔細候はず、常々御物語めされしは、嬉しくも我かゝるいみじき人を子にもち、我が身老體になりはてて、今日ともあすともしりがたし。僧都も今は四十に及べり。互に見え候ひ度く思へども、たま〳〵佛法修行する人を、暇を我が身故に片時の間も空しくせん事の罪深く覺えて、今まで心つよく過ぎぬるなり。我が最期に臨終の善智識には必ず呼びくだしてたまへと仰せけり。此の程も御病付き給ひて後、人をつかひ候はんと申せば、さりと

も死せざらんものゆゑに、呼び下し奉らんも憚り有り、今暫く、と御申し候ふ間、御病は次第に重く見えさせ給へば、思ひかね、今朝の御文をばかくし奉りてまゐらせ候ふなり。日比は、最後臨終の善智識には請じ下し給ひて對面有るべし、と仰せ候ひつるに、今は互にその本意相違して、空しき御姿を見給へる事こそ悲しけれ。甲斐なかりけるかねごとかな、年比僧都の御房の御心をも盡しはてたまひて、生きておはします時、こしかたゆくすゑの事互に申しのたまひたらば、いかばかり御心やすかりなん。と各々口説き給ひつゝ、たゞ盡きせぬものは涙なり。さても僧都御歎きの餘り、天に仰ぎ地に臥し、梵天帝釋 堅牢地神本□の護法に祈り給ふやう、積善あつくして一期の間の修行の薫修を廻向す。三寶佛陀必ず哀を垂れて我が願を叶へたまへ。七歳の時生きて別れたる母に今年四十二にして始めて見奉るに、此の世に無き人數に入り給へり。定業限りある道なれども、佛法不思議の力を以つて、刹那の間暇をゆるして生き給へる姿を我に一たび見せたまへ、と祈念したまふ。此の詞は神明も納受したまひ、三寶も隨喜したまひけるにや。息絶え魂去りて五つ時に餘り給へる人、忽に生きかへりて、わづかに眼を開き、僧都を見たまひて涙を流し給へり。僧都の心の中の嬉しさ、何に譬へんかたもなく哀にぞ見



えにける。小水の魚を大海に放したるよりも嬉しく、山家よりもかへりて七世の孫に逢ひたる人の心もいかで是にまさるべき。二人の御弟子より始めて介錯の人々、此の有様を見て哀なる事にも末代の不思議と思ひて、互に掌を合せて各々僧都を禮し奉りけり。

御母、良久しくありて正念に住して息の底にのたまはく、哀れなるかなよろこばしきかなや、恩愛の契深ければ、幼かりし姿をも忘れず、親子の昵芳しければ、病のけがらはしきをも忘れ給へり、我が身の老いたるはさておき、又、御身も既に四十に餘り給ひて、かほど老僧になり給ふまで見參申さねば、いかばかり恨みと思食すらん、對面のことは是より申すべしと、常に御返事申しし、かくの如く最後臨終の善知識なり、其の本意相違なく、今の對面返す〳〵もうれしく侍り、こしかた行末の事ども互に申すとも盡き候はず、中々心みだれて臨終の障となるべし、今偏に念佛の聲ばかり餘の事をまじゆべからず、佛の相好より外は他事に心をうつさじ、うれしき知識に逢へり、今は淨土に生るべし。とて自ら起きなほり、西に向ひて手を合せて十念禮し唱へ給へば、僧都も介錯の人々も共に念佛唱へけり。凡そ四十余返に及びし時、眠るが如く寛和元年九月十八日の酉の刻に御年七十九にして往生し給ひぬ。

誠に嚴重なる往生を遂げ給へば、歎の中の悅なり。されども、僧都多くの年月をこひ悲しみ給ひて、御年四十二にして始めて對面し給ひ、すぎしかたの事ども一ことは申しのべしことも空しく見なし給ひける僧都の御心の内こそ哀なれ。此の世の親子の德つきて、片時の間なる悲しさよ。宿緣ほどなしとて朗々たる十念正修の合掌の姿を泣く〳〵繪に寫し御まもりに納めつゝ日比の御名殘の切なればとて、七日にあたるまで生きたる人に向へるやうに、こしかたゆくすゑの事どもこまゞ〳〵とのたまひて、さめ〴〵と泣きあかし給へば誠に哀にぞ侍る。かくて日數もそゞろに過ぎしかば、盡きせぬ名殘はをしく思召しかど、泣く〳〵山の□のに送り一片の煙となしはてて、七七の日數過ぎぬれば、遺骨を頸に懸け、比叡の山にぞ上り給ひ、彌々道心の色深くなり給ひ、今生にてこそ母と伴ふ緣うすくとも、母君定めて極樂に往生有るべし。然れば淨土の再會を契らんと思食しければ、此の世に心留め給はず、急ぎ極樂に往生し、九品蓮臺の上にして御母を見奉り彌陀の御說法を聽聞すべしとて往生の行怠らず、長和三年六月十日御年七十六にしてほやくきやうし本尊に向ひ給ひて、五色の絲をのべて華嚴經の淸淨慈門刹塵數といふ文と面善圓淨如滿月といふ文をかたに修して念佛百遍に及べり。禪定に入るが如く入滅したまへり。



漢家本朝に名を揚げ德を施す事しげきによつてのせがたき中にも、父の遺言を違へずして修學の勤おこたりたまはず、御母の慈念深くまします故に、有りがたき上人となりたまへり。父の恩の深き事一しほ二しほの紅よりも色深く、父の德の切なること千顆萬顆の珠よりも過ぎたり。此の双紙御覽の御方は一返の御回向、または學文のよきたよりなり。よく〳〵つゝしむべし。

露光量違いの為重複撮影

昭和十年四月正木直彦先生から御浮施の惠心僧都の御物語變紙といふ本を頂いた時、十數年來この大德の行實に深いあこがれを持つてゐた自分は非常にありがたかつた。法隆寺貫主佐伯猊下からその一本を木曾不言會の人々へ賜はつた時、有志の間に之を小册子として敎へ子達に分けたいとの願さへあらはれ、飯島和子さんの手によつて原稿紙にかき改められた。自分は之に隨喜して活字本にするやう約束したが、忘れたわけではない忙しいのにまぎれてそのまゝにしておいたのを、木下春雄氏の隨喜助行で漸く出來上つた。原本を猊下から拜借して座右に珍敬すること半歲餘、校正させて頂いたが、中々むつかしい所があるので、やむを得ず缺字にしたりそのまゝにしておいたのは、宿業の所因無學やむを得ない。善根をつんで法の津澤を得て改めさせて頂く日をまつ、それはそのまゝでもよめる。唯母となる人に子となれる人に、讀んでこの大德の行實を考へて頂きたい。

昭和十一年六月七日法母庵にて　　正造謹記

昭和十一年六月十三日印刷
昭和十一年六月十八日發行
編輯兼發行者　奥田正造　東京市豐島區目白町三丁目三五七六番地
印刷者　三澤朝一　東京市小石川區大塚窪町三
印刷所　成光堂印刷所

露光量違いの為重複撮影

昭和十年四月正木直彦先生から御淨施の惠心僧都の御物語變紙といふ本を頂いた時、十數年來この大德の行實に深いあこがれを持つてゐた自分は非常にありがたかつた。法隆寺貫主佐伯猊下からその一本を木曾不言會の人々へ賜はつた時、有志の間に之を小册子として敎へ子達に分けたいとの願さへあらはれ、飯島和子さんの手によつて原稿紙にかき改められた。自分は之に隨喜して活字本にするやう約束したが、忘れたわけではない忙しいのにまぎれてそのまゝにしておいたのを、木下春雄氏の隨喜助行で漸く出來上つた。原本を猊下から拜借して座右に珍敬すること半歲餘、校正させて頂いたが、中々むつかしい所があるので、やむを得ず缺字にしたりそのまゝにしておいたのは、宿業の所因無學やむを得ない。善根をつんで法の津澤を得て改めさせて頂く日をまつ、それはそのまゝでもよめる。唯母となる人に子となれる人に、讀んでこの大德の行實を考へて頂きたい。

昭和十一年六月七日法母庵にて　　正造謹記

昭和十一年六月十三日印刷
昭和十一年六月十八日發行
編輯兼發行者　東京市豐島區目白町三丁目三五七六番地　奥田正造
印刷者　東京市小石川區大塚窪町三　三澤朝一
印刷所　成光堂印刷所

終